



精魂をこめて

中部電力株式会社 取締役副社長 服部 弘

電力設備は需要動向に対応して年々増大・複雑化してきている。特に最近では供給信頼度を向上するための設備が色々取り付けられ、電力系統の複雑化にますます拍車がかかっている。

一方、最近の水力発電所や変電所はほとんど自動化・無人化されてきている。もちろんこういった施設の自動化は監視装置や制御機器等の発達に負うところが大きい。しかし、それもまず施設が自動化しても大丈夫だということ、換言すれば色々の機器類がすべて仕様通りに動作し、故障のないことが前提になる。

ところで、電力施設を構成する主体は電力機器であり、これらの機器を互いに連携しあつたものの総称が電力系統である。電力系統の主役をなす電力機器にとって、信頼度向上のキャスティングボードを握っているのは機器メーカーといつても過言ではない。

信頼度を向上するためにはまず何よりも事故を減少させなくてはならない。雷あるいは台風などの自然現象による事故はともかく、電力機器の故障による事故は最近著しく減ってきている。関係者の品質向上への弛まざる努力の成果であろう。

それは、戦後凄じい勢いで伸びてきた技術革新の波に立ち向って、関係者の皆さんが果敢に挑戦してきた成果であり、今後とも新技術の採用により故障はさらに減少していくことと思う。

このように、最近では電力機器の故障はめっきり減少してきてはいるが、残念ながら皆無というわけではない。最近の故障の原因を調べてみると、設計のミス等の技術的な問題に拘る例はほとんどなくなり、一寸したミスが原因となっている例が多いようである。

例えば、珪素鋼板の切断が悪く、切断後の返りがうまく絶縁処理されていなかったために、積層端面で鉄心が短絡した状態となり加熱して大事故に至ったことがある。初めは、事故が大きいだけにまさかこんな些細なことが原因だとは思いつかず、原因究明に大騒ぎをさせられたことを憶えている。切断機の刃物が悪かったのか、材料が悪かったのか、あるいは加えるべき工程を忘れた工程管理面のミスであつたのか、いずれにしても基礎技術というか、いわゆる職人的技術を軽視した報いであろう。

技術革新のテンポは早く、これに追隨していくことさえ並大抵のことではない。人間がリードしていくべき技術革新に逆に人間が振り回されているような気もしないではない。

技術革新のテンポが急の余り最先端の技術と基礎技術とのギャップがどンドン広がり、基礎技術が置きざりにされて、折角の最先端技術も砂上の楼閣に終わってしまうことになりはしないだろうか。

「精魂をこめて」という言葉がある。昔の職人が気合いの入った仕事をしようというときによく使った言葉である。今の時代には通用しない言葉かもしれない。しかし機器を作る場合にも、こういった気持ちで作ってもらえれば必ず良いものが出来るに違いないと思っている。

いくら最新鋭の機器を作ってみても、それが故障を起こすようなものでは使いものにならない。長い間積み重ねてきた技術の蓄積をベースにして初めて最先端の技術も生きてくるのではあるまいか。

戦後、愛知電機が変圧器メーカーとして大きく伸びてこられたのも、数多い経験の中から得られた沢山の技術の蓄積があつたからだと思っている。

この度、技報を発刊されることになったのは、長い間技術者の頭の中に眠っていた色々の技術に日の目を見る機会が与えられたわけである。

今後この技報が社員の皆さんの力によって愛知電機の柱に留まらず、さらに大きく育って欲しいものと願っている次第である。